

さちひろ

発行：天理教狭千廣分教会

〒589-0021

大阪狭山市今熊1-1133

TEL072-365-2571

E-mail:wat@sachihiro.com

url:http://sachihiro.com

編集兼発行人・山口 渡

天理教狭千廣分教会の広報紙

- 1面・善種善果への祈り
- 2面・よろこびいっぱい
- 3面・おやさま逸話から
- 4面・教会の動き・編集後記

医学は素晴らしく進歩しましたが、病気は減っていません。むしろ増えているようです。人間の心、社会の機構が複雑になるにつれて病気が複雑怪奇になって来ているのではありません。

ポリオ（小児麻痺）ワクチンを発見したヒラリー・コプロフスキーは、「あらゆる感染症に効果のある抗生剤の発見は、人類を破滅に導くかも知れない。細菌やウイルスから開放された人間は、未知なる微生物に無防備にさらされるであろう」と述べています。あのエイズの起源をこのポリオワクチンにあるのではないかという仮説が出されて、注目を集めた学者です。人間は無闇に薬剤療法に走った計画に乗ったりしないで、一種の妥協を図りつつ病気と共存するべきで、かえってその方が伝染病や感染症に対して効果があるのではないか、あるいは将来起こりえる新しい病気に対しても優位に立ち向かえるかも知れません、と訴えています。すばらしい知見だと思います。

しかしそれだけで、十分ですか。天理教は、「病の元は心から」と教えます。「病の根を切る」と説きます。人間は人間の力で生きているの

善種善果への祈り

でしようか。そうではなくて、生かされているという不思議な事実を承知することの大切さを悟らなくてはいけないのではないのでしょうか。

医者・医学は「修理・肥」――末、親神様の働き・守護は「本」「元」です。医者・薬は、神様の働きの手伝いする役割のものです。薬が効くのも、手術がうまくいくのも、みんな神様のお働き・ご守護の賜物です。

わたしたちは、蒔いた種の通りの人生を送ります。種とは人間の心、日々の心遣いが種です。日々、どんな種を蒔くかが問題です。善種善果となるよう心を改め、入れ替えましょう。そのための祈りの行為が「おさづけ」と言えるでしょう。おさづけの取り次ぎは、人を病から救います。おさづけの取り次ぎを通して、神様のご守護に気付かせていただいて、自分の心も入れ替えられます。

おさづけは、ちば・親里で、別席において、神様のお話を9回聞いた後に頂くことができます。



教会の動き

さちひろ

教会の動き

- 朝づとめ…毎朝・6時30分
- 夕づとめ…毎夕・7時00分
- 春季大祭…1月21日午後1時30分
- 秋季大祭…10月21日午後1時30分
- 月次祭…毎月21日 午後1時30分
- 春・秋季霊祭…3月22日、9月22日 午後1時30分

※教会の場所は、左の地図のマーク。市立公民館の裏・西側です。



ひのきしんデー実施！

教祖百二十年祭・全教一斉ひのきしんデーが4月29日に、全国各地で実施されました。前号でお知らせしたとおり、阪南支部・第五組（大阪狭山市地区）は、今熊1丁目、教会の北側にあります戦没者慰霊塔周辺で実施しました。降らず、照らずのお日和のもと、除草、清掃の作業にあたらせていただきました。

参加者は、男性・33名、女性77名 計ちようど100名でした。

中河大教会少年会総会

例年3月末に開催されます少年会おつとめまなび総会ですが、今年は教祖百二十年祭を記念して、形を変えて先の通り本部で開催されます。

日時 平成18年5月28日
場所 天理大学柚之内第一体育館
内容 組対抗の室内競技

《編集後記》

▼今年のGWは5月1・2日を挟んで9連休、あるいは10連休の方もいらっしゃるかも知れませんが、ここに至る頃です。温かい日差しを感じる今日この頃です。

▼前号の巻頭に「見直される修身の教科書」を書いた直後、櫻井よしこさんが毎日新聞（4月15日・朝刊）に見直されている教育基本法の「愛国心」に関連して、「今の法には道徳的価値観の記述がない」「教育勅語の廃止が子供の歪みを生んだ」との論評を掲載されました。わが意を得たりと、ひそかに、思わずほくそ笑んでいるわたしでした。

▼今号の巻頭の一文は、上級教会青年会機関紙「飛躍」に掲載したもので、多少加筆訂正の上、本紙に再掲しました。

さちひろ 第11号

編集兼発行人・山口 渡

平成18年5月5日

大阪狭山市今熊1丁目1133番地

TEL・072-365-2571



天理の紹介

よろこびいっぱい

「ふしから芽が出る」

― 見方を変えて、困難を解決する力をつける方法 ―

キミたちが毎日生活する中で、つらいことやいやなことがあるでしょう。腹が立ったり、何もかもリセットしたくなったり。でも現実には、テレビゲームのようにはいきません。こんなとき、どう考えたらよいのでしょうか。

「ふし」ってあるでしょう？

竹でいうと、横にスジが入ったところ。

木でいうと、枝のつけ根のところ。

いずれにしても堅いつなぎ目のようなところですよ。

教祖は、「ふしから芽が出る」と教えてくださいました。

そういうつらい出来事は、堅い「ふし」のようなもの。

木や竹の新しい芽が、その堅い「ふし」から出てくるように、

ぶつかっていくと、いやなことから逃げないで

そこから新しいことが生まれます。

新しいものの見方ができるようになったり、

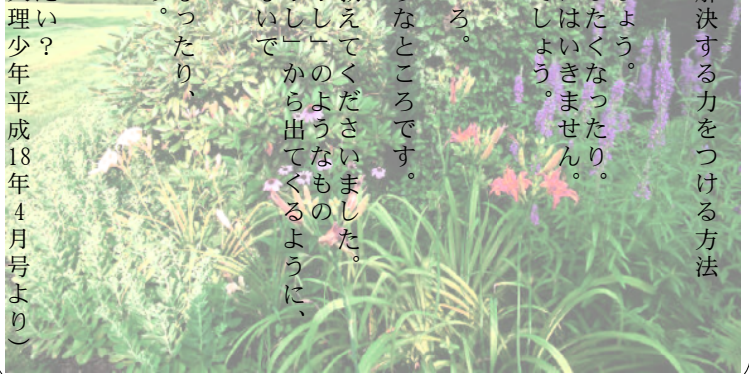
自分で困難を解決する力がついたり。

折れてしまうのも「ふし」から。

芽が出るのも「ふし」から。

キミは今の「ふし」、どっちにしたい？

(リトルマガジン・天理少年平成18年4月号より)



騷 (しつけ)

騷は「ツのつく時に、ツけなければ、ツかない」という。

つまり、一ツ二ツ三ツ：九ツまでの騷が身につき、十からは付け焼き刃で身につかないそうだ。

そういえば最近、道の小草にも嫌われる幼年期を、過保護で育て、わがままが身についた少年期になって、あわててしつけを押しつける。

そのあげくが親子断絶。

宝であるべき子供が、一家の患いになるケースが増えている。だから、親が子供に対して負う、もっとも大きな義務は、心の柔軟な幼児期の騷である。

幸せを届ける言葉

高橋美津志「ちよつとひとこと」

(善本社刊) から

『稿本天理教教祖伝逸話篇』

167

加見兵四郎は、明治十八年九月一日、当時十三才の長女きみが、突然、両眼がほとんど見えなくなり、同年十月七日から、兵四郎もまた目のお手入れを頂き、目が見えぬようになったので、十一月一日妻つねに申し付けて、おぢばへ代参させた。教祖は、

「この目はなあ、難しい目ではあせん。神様は一寸指で抑えているのやで。そのなあ、抑えているというのは、ためしと手引きにかかりているのや程に。」

と、仰せになり、つづいて、

「人言伝では、人言伝で。人頼みは、人頼み。人の口一人くぐれば一人、二人くぐれば二人。人の口くぐるだけ、話が狂う。狂うた話した分にや、世界で誤ちが出来るで。誤ち出来た分にや、どうもならん。よって、本人が出て来るがよい。その上、しっかり論してやるで。」

と、お諭し下された。つねが家にもどって、この話を伝えると、兵四郎は、「成る程、その通りや。」と、心から感激して、三日朝、笠間から四里の道を、片手には杖、片手は妻に引いてもらって、お屋敷へ帰って来た。教祖は、先ず、

人救けたら

「さあく」

と仰せあり、それから約二時間にわたって、元初まりのお話をお聞かせ下された。その時の教祖のお声の大きさは、あたりの建具がビリビリと震動した程であった。そのお言葉がすむや否や、ハツと思うと、目はいつとなく、何んとなしに鮮やかとなり、帰宅してみると、長女きみの目も鮮やかに御守護頂いていた。

しかし、その後、兵四郎の目は、毎朝八時頃までというものは、ボーッとして遠目は少しもきかず、どう思案しても御利やくない故に、翌明治十九年正月に、又、おぢばへ帰って、お伺い願うと、

「それはなあ、手引きがすんで、ためしがすまんのやで。ためしというは、人救けたら我が身救かる、という。我が身思うてはならん。どうでも、人を救けたい、救かつてもらいたい、という一心に取り直すなら、身上は鮮やかやで。」とのお諭しを頂いた。よって、その後、熱心におたすきに奔走するうちに、自分の身上も、すっかりお救け頂いた。



【解説】

●てびき 信仰の道に神様が手を引いて導かれます。そのような印(身上・事情)を「てびき」と言われます。それを悟って通ることが肝要です。

●ためし↓証拠信心
しよこふもとふゆう事にをもうかな
みのうちよりにたしかためしを

このたびはどんなためしをするやらな
これでしいかり心さだめよ
十二号116
十五号6

「ためし」は「試し」、すなわち実験のこと。おつとめや心定めを実際に行って、神様の働きを得れば、真実であることを体感できます。それを自ら実験して試せとの仰せです。そうすれば、話が真実であることがわかり、それが証拠となつて、他の人にも、この信仰が真実であることが伝えられます。これを証拠信心と言われ、天理教信仰の大きな特色の一つです。